

0470-



free paper

8





# 0470-people 山口マオさん

インタビュー、文・菅野博

【やまぐち・まお】イラストレーター。1958年千葉県千倉生まれ。84年東京造形大学絵画科卒業。88年宇宙百貨よりMAOグッズ制作開始。91年「年鑑日本のイラストレーション」新人賞。93年週刊朝日「むくどり通信」連載。ニューヨークADC賞・TDC賞入賞、ロンドン国際広告賞、他を受賞。エディトリアル、広告、TVCF、絵本、装丁、ポストカードやカレンダー、グッズ制作に至るまで幅広いジャンルで活躍。二足歩行の不思議なキャラクター「マオ猫」が有名。最近はシリーズ5作が発表されている『わにわに』も人気。

## デビューと結婚

子供の時から絵を描くのが好きで、美大へ行き、友だちの影響でイラストレーターを志しました。卒業後、公募展などに出すようになってイラストレーションという雑誌の「ザ・チョイス」という公募をきっかけにデビューできることになった。そのきっかけは結婚することになって奥さんの実家に何で言ったらいいだろうと。仕事もないし、収入のあてもはつきりしていないし、結婚するにしても説明の仕様ががない。何とか実績を出さなければと思って。それで1回目で入選しちゃった。その実績を持って妻の実家に説明をしたら、あーそうなんだ。がんばんなさいよ。みたいなことになって、結婚することができた。ザ・チョイスは年に6回公募があったんだけど、最初と最後に入選することができて、最後に入選したのが「うでずもう」という作品。この作品がマオ猫(表紙イラスト参照)の原型ですね。

## マオ猫、誕生

マオ猫が生まれた理由って自分でもよくわかんないんですよ。勝手に出てきたんですけど。もともと猫は好きだったんですよ。小さい頃からかわいがって飼っていたんだけど、大学生の時にたくさん猫を世話しすぎて飼っているのか飼わされているのかわからない状態になっちゃって。トイレの世話とかご飯の世話とかで結構たいへんな訳。5匹以上いたかな。それで飼っているのか飼わされているのかわからないような、人間と猫が逆転したようなイメージが出てきて。同時に若気の至りで抱いて



『うでずもう』 木版

いた「何で人間がそんな偉そうにしてくんだ」という反発的な想いと、擬人化した猫というのが一体化して、うでずもうで大人に勝っている猫とかを描いていた。大学の後半からそんな絵を描き始めて。猫がサラリーマンを散歩させてる絵とかね。

千倉へ、海猫堂オープン、そしてアートフリーマーケット開催へ

東京でいろいろな仕事をもらえるようになって、1996年に千倉に引っ越してくるんだけど、もともと前から奥さんが田舎に引っ越したいって言うて。松本とか小淵沢とか長野の方を見に行ったりしてたの。でも、そうこうしているうちに父親が亡くなってしまって、急に千倉っていうのが浮上ってきて。たまたま実家の隣が空家になっていて、それが決め手となって千倉に戻ることにするんです。イラストレーターになった当初は東京の毒みたいなのを自分の原動力に絵を描いていま

した。貧乏だったし、若かったし、社会的なパンクロックみたいな、反抗心みたいなものがあつて、猫の力を使って社会へ反抗するみたいなことをしていた。そういうシニカルな思想があつて。でも、仕事をもらえるようになってからあんまりハングリーではなくなってきた。東京の毒はもういつかということになって。あとは自分が自然の中で育つてくれるといいなという思いがあつて。千倉へ来た翌年に海猫堂を出すんだけど、ちょうど潮風王国という道の駅ができる直前でテナント募集していた。僕は千倉で居場所がほしかったんです。自分の拠点がほしかったんだよね。こつちでやってるっていう確信が。その後、アートフリーマーケットを企画するようになったのですが、千倉へ来て2、3年後にヨーロッパに旅行に行つたんですけど、プロバンスという場所に行つたんですけど、プロバンスと千倉が非常に似ているという話があつて。そこにはマルシェがあつて、食

があつたり、カラフルなスパイスがあつたり、手作りのランプが売つてたりとか、食とアートといろいろなものがあるに並べられていて、それに大道芸人がいて、仮装してるミュージシャンがいてとても楽しい感じで、こんなの毎日見たら最高だなと思つてた。それを千倉で実現しようと、始めました。最初は50ブースとかだったけど、今は100ブース以上。だんだん規模が大きくなっています。

## 25周年、これから

楽しかったから今まで続けられてきた。大学受験に失敗して、1日中絵を描いていられる幸せが予備校から始まって、それからずっと絵が好きだったから続けられた。でも、先は全然見えない。私は今53才ですが、サラリーマンだったら定年退職まであと5、6年ですよ。僕らの仕事は60で終わらないし、70、80、へたしたら90まで働かないといけない世界なんです。でも、体が動く限りは絵

山口マオ展覧会  
マオ猫の目録

2012年3月16日(金)~4月15日(日)  
13:00~19:00 (休廊:月・火)

hiromart gallery tokyo  
東京都文京区関口1-30-7三村ビル1F  
☎ 03-6233-9836  
http://hiromartgallery.com  
作家在廊日: 3/16、17、21、31、4/15

『勇氣ある人々』 木版

千倉の民話 その1

「てながばばあ  
手長婆」

山口マオ 再話  
絵

白間津の氏神様に近い山腹に、<sup>てながばばあ</sup>手長婆の洞<sup>ほら</sup>があるという。  
その昔、この洞に一人のお婆さんが住んでいたそうなの。  
このお婆さん、恐ろしく手が長く、この洞から磯まで手が届  
いたと言います。その上、顔が鬼婆のように恐ろしい  
為、誰一人、手長婆とつき合う人はいませんでした。  
手長婆は一人ぼっちでした。  
そんな手長婆の楽しみは、サザエやアワビなどの磯もの

を採ることでした。  
手長婆は洞<sup>ほら</sup>が長<sup>なが</sup>い手を伸ばすと、里越<sup>さとこ</sup>しに磯<sup>いそ</sup>の  
アワビやサザエを採<sup>と</sup>っては食べる<sup>く</sup>のでした。



Folklore of Chikura part 1 "TE-NAGA BABA"  
by Mao Yamaguchi

0470-pick up

珈琲館サルビアの  
「イチゴショートケーキ」

取材・菅野博  
文・岩松裕子



ケーキは食べないの？ちなみにオレは頼むよ、イチゴショート。うまいんだ。今の時期しかないし。あ、ショートケーキの上に乗ってるイチゴって先に食べる派？あとで食べる派？ちなみにオレは悩みつっ先に食べるんだけど。でもこのって上に乗ってないから悩まないですむんだよね。ちなみになんか、でかくてさ。まるごとイチゴ、何個入ってんだよ、っていう。まあ、とにかくおすすめ。頼みなよ。なんかかっこ悪いじゃん、オレだけイチゴのケーキ食ってるの。

「朝ごはんを食べたら、あの山を散歩しよう」と友人が言った。東京から、泊りがけで初めてこちらを訪れた彼は、起き抜けに見た景色に興味を持ったようだった。

「朝ごはんを食べたら、あの山を散歩しよう」と友人が言った。東京から、泊りがけで初めてこちらを訪れた彼は、起き抜けに見た景色に興味を持ったようだった。

僕の家の窓からは、年中青々とした山が見えている。房総半島南部の海沿いでは、山肌にスダジイやトウジイ（マテバシイ）といった、丸い樹冠をもつ照葉樹を見かける事が多い。モコモコしたその風景を、まるでプロッコリーのようだと言っ人もいる。

麓に着くと、薄暗い森の奥へと細い道が伸びていた。森の中では、おびただしい数の木々が明るさを求め幹や枝をくねらせていて、その造形は強い意志に満ちていた。僕はおもわず息を吞んで歩き始めた。森の中のところどころには、ドングリが落ちていた。何個か拾ってみると、幼い頃に作って遊んだ、笛やコマの事を思い出した。

しばらく歩くと、不意に風が吹いてきた。葉はそれまでにない音を立ててざわめきだした。「おお、プラネタリアウムだ。」彼の声に促され見上げると、頭上には無数の光があった。風が吹いている間、森に差し込む光が黒い葉陰に細かく遮られ、その光はキラキラと交互に光りつづけた。

数日後、彼から冗談めいたメールが届いた。そこには陳列棚に積まれたプロッコリーの写真が添付されていて、「いつものスーパに小さい森を発見。またそっちに行くのを楽しみにしてるよ。」と書いてあった。



0470-scape  
「トウジイの森」

文・前田宣明 絵・鈴木麻子

「と笑いながら差し出してくれたフォークを使って食べたそれは、見た目通りに誠実で実直な味がした。

いつもはマックや中パンだけど、すこし背伸びしたくてサルビアへ行く。館山の高校生にとって「珈琲館サルビア」はそんなお店な気がします。そして大人になってこの街を離れても、苺の季節が来たらきつと、珈琲の香りと、甘酸っぱいイチゴショートのを、懐かしく想い出すんだと思います。

サルビアの珈琲って美味しいよね。などと大人ぶったことを言っていたけれど、きっと本当の目当てはこっちだったにちがいない。だからなんとなく意地悪心が働いて「食べたらいよいよ、私は珈琲だけで良い」と言ってやったのだが、けっきょくあとで後悔した。大きな白い皿に乗った飾り気のないショートケーキは、やたらと正確な長方形の断面が印象的だった。「だから頼めて言っただ

新鮮で大粒な館山産の苺を、カットせずそのまま使ったサルビアのショートケーキ。苺の取れる季節限定のメニューなのですが、今年は涼しいので4月末くらいまでは出せそう、とのこと。まさに苺を美味しく食べるためのケーキという感じのすてきなバランスで見た目はボリュームがあるけれど食べ飽きません（大人も！）。ちなみに、テイクアウトもできます。

珈琲館サルビア 営業時間 10:30~19:00(水休)  
☎0470-23-2341 / 館山市北条 2576  
<http://www.salvia-coffee.com>

1971年開店、館山の老舗珈琲店。静かな音で音楽が流れ、少し照明を落とした店内は、落ち着いた雰囲気ですっきりとコーヒーを楽しめます。深くコクがあって後味さっぱり自家焙煎珈琲は、毎日飲みたくなる定番の美味しさで長年のファンも多いそうです。店頭と宅配で豆の販売もしています。



編集後記  
\*\*\*\*\*  
一月に千葉市で行われた、マオさんの展示会に行ってきました。約300点の作品が展示され、イラストレーターや画家としての幅広い世界観に触れることができました。が、「実はあれはまだ1/5くらいの数だよ。」というから驚き。今年でデビュー25周年のマオさんです。そういう、インタビューをしたのはネコの日でしたー(前田) \*\*\*\*\*  
今年の房総は例年になく寒かったようです。しかし、寒かった分、房総のお花やいちご狩りなど少し長く楽しめそうです。春にはイベントも盛りだくさんです。今年のアートフリーマーケットも大注目です。春の房総を楽しみましょう。(菅野) \*\*\*\*\*  
春一番の鶯の声を聞くころにはまだ冬ぼけたコートを着ているトウジイの森も、菜の花が咲き終え、鶯のホケキョがちょつと上達するころには新芽で黄粉色になります。春の房総は、オーケストラのクライマックスのように、音も色もどんどん増えてゆきます。(岩松) \*\*\*\*\*